

平成 21 年 5 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2005～2008

課題番号：17520187

研究課題名（和文） ドイツ同時代文学の受けた社会的・歴史的刻印—21 世紀文学への展望

研究課題名（英文） The socio-historical Impacts on the Contemporary German Literature

研究代表者

初見 基 (HATSUMI MOTOI)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：90198771

研究成果の概要：

本研究では、過去 20 年ばかりのあいだに公表されたドイツ語圏の文学作品及び知識人の社会的発言を主対象として、1990 年のドイツ統一以降のドイツにおける文化の変動を追う作業が中心となった。そのための資料を、書籍媒体にかぎらず、その他、新聞・雑誌、Web サイトなどからも収集するとともに、その分析を同時代的観点から行なった。さらに、戦後史という時間軸からこの分析を理論的に深めた考察を進めた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	1,200,000	0	1,200,000
2006 年度	700,000	0	700,000
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,400,000	450,000	3,850,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：戦後ドイツ文学，現代ドイツ文学，ドイツ政治文化，集合的記憶，歴史意識の規範化

1. 研究開始当初の背景

1990 年のドイツ再統一前後を境にして、ドイツの政治、経済そして社会はおおきく変動したが、これと連動するかたちで「政治文化」も根本的と言える変化をこうむっている。こうした事情は、個別の事件、論争等についてジャーナリストティックなかたちで報告されることはあったが、ドイツの政治文化全般を概観したうえで資料を系統的に収集し、それを理論的に分析する作業は、とりわけ文学の

分野では進んでいなかった。

そこで本研究は、1990 年以降のドイツにおける文学作品及び文学者を中心とした知識人の公的発言を主対象として、そのテキスト分析を進めることを通じて、以下の点を目指して開始された。

- (1) 現在進行中の事柄を同時代的に追いつつ系統立てて観察してゆく。
- (2) それと同時に、(1)の観察結果を戦後史

という大枠の裡に位置づけることによって、ドイツの「戦後文化」の新たな評価につなげてゆく。

(3) 以上の成果をさらに、より理論的に考察することによって、現在進行中の事柄を「近代文化史」の流れのなかに置き、そのことによって今後のありうべき「文化」のあり方を問うてゆく。

2. 研究の目的

ドイツにおいて東西冷戦構造が崩壊した1989年、そして東西ドイツ国家が再統一を遂げた1990年を境に、政治、経済をはじめとしてドイツ社会はおおきな変化を呈した。そしてこれと連動するかたちで「政治文化」の変動も顕著にあらわれている。

本研究では、この「政治文化」の変動に着眼して、ドイツ語圏の文学作品及び文学者をはじめとする知識人の公的発言を対象に追いつき、それを理論的に考察することを主目的としている。

より詳細に述べるなら、本研究では以下の点を目標に据えていた。

(1) 基礎資料として1990年前後以降の文学作品及び知識人の諸発言を収集して、それを整理する。

(2) 収集・整理した資料を検討して、ドイツの「政治文化」において進行している事態を同時代的に追ってゆく。

(3) 観察結果をより理論的な枠組みのなかで考察し、「近代文化史」に位置づけなおしたかたちで現在進行中の事態を再吟味してゆく。

そして本研究ではさらに、この間の「政治文化」変動に伴って生じている、戦後の規範を見直そうという新しい動向に焦点を当てて、それによって、冷戦構造の解体という社会的事象と文化的領域一般とがいかなる相関関係を持っていたかを解明することを目指した。

3. 研究の方法

本研究にあつては、第一に当該資料の系統のかつ包括的な収集及び整理、第二に収集・整理した資料の読解、テキスト分析、第三にその分析をより理論的に考察する、という三つの柱が中心となった。

(1) 現在進行中の事柄についての資料を収集する作業としては、1980年代半ば以降を目安として、書籍化されているドイツ文学作品のほか、新聞・雑誌に掲載された作品、論文、エッセイ、さまざまな記事、並びにそのCD-ROM化されているもの、さらにはWebサイト掲載の文書などまでを含めて収集する作業を進めた。

また現地への出張によって、ごく少数数発行のため一般に入手しにくいパンフレット類を収集する作業も行なった。

(2) 収集資料の分析に当たっては、文学作品については、主としてテキスト分析を行なった。知識人の公的発言に関しては、主としてそのディスコース分析的な接近によって検討を進めた。

また随時開催されている研究会を通じて、領域の重なる研究者との意見交換を継続的に行なった。

(3) 分析結果の理論的考察に関しては、研究代表者の従来の研究対象であるヴァルター・ベンヤミンの所論の批判的考察を踏まえたかたちで、戦後ドイツの「政治文化」を歴史意識「記憶」が社会的に規範化されてゆく過程と捉え、そのなかで1990年以降の変化を「規範」への反指定と位置づけて考察を進めていった。

4. 研究成果

(1) 資料の収集・整理

書籍については、1990年以降の出版物を系統的に購入した。ただし研究代表者が2007年度末をもって、勤務していた東京都立大学を退職し、科研費購入の書籍はすべて大学図書館への寄贈が定められていたため、計画に若干の不都合が生じている。とはいえ、所蔵そのものは確認できているため、2008年度も方針を変更することなく収集をつづけた。

ドイツ出張によって少数数流通のパンフレット類なども一定程度集めることができた。

CD-ROM化された新聞も1990年代を中心に系統的に収集したが、書籍の場合と同じ理由で即座に利用できる環境にはない。

Web公開の資料については定期的に保存しているが、目下のところこれを系統的に整理するまでには到っていない。

(2) 資料の分析・検討

作品分析の結果は、2冊の戯曲の翻訳及びそこに付された「解題」として世に問うている(下記「図書」①、②)が、これについてはとくに演劇関係者からきわめて高い評価

を得ている。

研究会発表等を行なったままでまだ論文化されていないままの成果が何点かあるが、これは数年内に順次発表されてゆく予定である。

また学会における口頭発表の枠内で、作品分析の中間的成果を発表している（「学会発表」①）。

さらに、現代ドイツにおける新しい文学作品を分析した成果は、研究代表者が編集委員を務める雑誌 DeLi (2003 年創刊準備号刊行、2006 年の第 6 号までを沖積舎より、第 7 号以降目下のところ 2008 年の第 9 号までを論創社より刊行) において毎回作品の翻訳を掲載するというかたちで社会還元し、高い評価を得ている。また 2005-2008 年にかけて研究代表者が編集委員の一人を務めて、「ドイツ現代戯曲選」全 30 巻（論創社）を刊行した。

DeLi 及び「ドイツ現代戯曲選」で扱ったうちの 2 作は、2009 年に新国立劇場で上演され、その存在価値が世に認められている。

(3) 理論的考察

近年の政治文化の動向を、ヴァルター・ベンヤミンの歴史認識をめぐる議論と重ね合わせた研究は、論文のかたちで世に問うている（「論文」①-⑦）。これは戦後文学研究及びベンヤミン研究の双方に新しい観点をもたらした。

これら数点の論文を中心として、それ以前の研究を含め、本研究課題の研究成果をより包括的かつ詳細に集約した著作を目下準備中である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

①初見基、〈書く〉こととメディア—W・ベンヤミンの〈媒体〉観を手がかりに、日本大学桜門ドイツ文学会「リュンコイス」第 42 号（2009 年）51-67 頁、査読あり

②Motoi Hatsumi, Das Gedächtnis und die Nation. Wie das Nationale zu konstruieren ist. In: Kulturwissenschaftliche Germanistik in Asien. (2008) S. 227-239, 査読なし

③初見基、やはり和解せず—西ドイツ社会とハインリヒ・ベルー、「ストローブ=ユイレ コレクション 和解せず」（紀伊國屋書店、2008 年 9 月）18-25 頁、査読なし

④初見基、映画「アンティゴネ」への接近のために、「ストローブ=ユイレ コレクション アンティゴネ」（紀伊國屋書店、2008 年 9 月）4-20 頁、査読なし

⑤初見基、物語なき救済—ベンヤミンの歴史構想の一断面—、『ベンヤミン』（河出書房新社、2006 年 6 月 21 日）110-113 頁、査読なし

⑥Motoi Hatsumi, Richard Sorge und die literarische Darstellbarkeit des Spions. Bevorzugt beobachtet. Zum Japanbild in der zeitgenössischen Literatur. (Iudicium Verlag München, 2005) S. 66-78, 査読なし

⑦初見基、鏡に向かって撃て—六八年世代としてのファスビンダー、渋谷哲也・平沢剛編集『ファスビンダー』（現代思潮新社、2005 年 9 月 30 日）107-126 頁、査読なし

〔学会発表〕（計 3 件）

①初見基、想起の規範的な力に抗して—戦後文学のなかのイルゼ・アイヒンガー、日本独文学会（2008 年 6 月 15 日、立教大学）

②初見基、〈集合〉の両義性—W・ベンヤミン「シュルレアリスム」を中心に、日本フランス語フランス文学会（2007 年 11 月 10 日、関西大学）

③Motoi Hatsumi, Das Gedächtnis und die Nation. Wie das Nationale zu konstruieren ist. ソウル・アジア・ゲルマニスト会議（2006 年 8 月 29 日、ソウル大学）

〔図書〕（計 2 件）

①ボート・シュトラウス（初見基訳・解題）『終合唱』（2007 年 3 月、論創社）全 141 頁 [解題「〈森〉へ—ボート・シュトラウス「終合唱」へのいくつかの観点」129-141 頁]

②ライナルト・ゲッツ著（初見基訳・解題）『ジェフ・クーンズ』（2006 年 11 月、論創社）全 256 頁 [解題「空疎さのなかの〈光あれ〉」243-256 頁]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

初見 基 (HATSUMI MOTOI)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：90198771

(2) 研究分担者

高本 教之 (TAKAMOTO NORIYUKI)

東京都立大学・人文学部・助手 (2005-2007
年度)

研究者番号：40315742

(3) 連携研究者

無し